女教師 彩花二十四歳

第四巻

中学生の日記を覗いた女教師

海老沢 薫 著

内容

■著作権について
■まえがき
■第一章　不登校になった女子生徒
■海老沢薫ＢＬＯＧ
■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説
※海老沢薫ＢＬＯＧ
・・・最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。
https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/

■著作権について

「**女教師　彩花二十四歳　第四巻　中学生の日記を覗いた女教師**」（以下本書と表記する）の著作権は【海老沢薫】にあります。

・本書のすべての内容は、日本の著作権法、及び国際条約によって保護されています。

・「海老沢薫」が事前に書面をもって許可した場合を除き、本書の一部、または全部を、あらゆるデータ蓄積手段（印刷物、電子ファイル、ビデオ、テープレコーダー）により複製、流用、転載、転売することを固く禁じます。

・著作権の侵害につきましては、著作権法第119条などの罰則がありますのでご注意ください。

■まえがき

私立中学校に勤める木元彩花は、全校生徒の身体測定に参加させられた日から学校生活が一変していた。

校内の中を歩いている時には生徒や教職員達から好奇と軽蔑の入り混じった視線を向けられ、もう何処にも教師としての自分の居場所などないように感じて始めていた。

そんな中、彩花は自分の事以上に心配している問題があった。それは、担任を受け持つクラスでイジメに遭っていた女子生徒、麻理絵の存在だった。

いつかの放課後、クラス委員の智子達からイジメられている麻理絵を、彩花自らがその身代わりになってまで助けたはずだったが、麻理絵はそれからなぜか不登校になってしまっていたのだ。

そして、麻理絵からこっそり教えて貰っていた彼女のブログを覗いた彩花は、自殺をほのめかす様なメッセージがそこに書き込まれ

ているのを発見し、彼女がまだイジメに遭っているのではないかと疑い、意を決して智子達を問い詰めた。

しかし、智子達はイジメの事実を認めようとはせず、逆に彩花を脅して麻理絵の家に一緒に家庭訪問する事を提案する。

麻理絵の家を訪問した担任の彩花とクラスメートの智子達。そこには美人女教師をさらなる窮地へと追い詰める智子達の画策があったのだ。

■第一章　不登校になった女子生徒

全校生徒の身体測定が行われた日から一週間が過ぎようとしていた。あの日、女子生徒の身体測定が行われた体育館の中で起きた出来事は、その場にいた女子生徒達からすぐに男子生徒達へも伝わり、彩花が演じた恥ずかしいショーの事は全校生徒が知る所となっていた。美しい女教師の恥ずかしい姿を見る事ができなかった男子生徒達は皆悔しがり、女子生徒達から伝え聞いた話を頭の中で勝手に膨らまして妄想して興奮するしかなかった。

そして、身体測定の測定係として体育館に居合わせた女性教職員達もまた、若くて美しい女教師が晒した常軌を逸した行為について、話を盛りながら校長や教頭を始めとする男性教職員達に伝えて回ったのだった。

結果、彩花はあれから学校の中にいる間中、生徒や教職員から好奇と軽蔑の入り混じった

目で見られるようになり、彩花の体を服の上から透視でもするかのように露骨な視線を向けてくる者達も後を絶たなかった。いやぁ、みんな私の事を厭らしい目で見てる・・・。

教室で授業をしている時、校舎内の廊下を歩いている時、職員室にいる時、登下校する時、どんな時でも生徒や同僚教師のギラギラした視線を全身に感じていた彩花は、何処にも心休める居場所などなかった。

もう、こんな学校から居なくなりたい、いっそ教師を辞めてしまいたい。小さい頃からの憧れてなったはずの教師という職業すら手放したくなるほど、彩花の心は追い詰められてしまっていたのだった。

しかし、そんな日々を過ごす彩花にも、自分の事以上に気がかりな問題があった。それは、自分が担任を受け持つクラスの女子生徒、吉野麻理絵のことだった。彩花の順風満帆だった教師生活が大いなる渦の中に巻き込まれていくことになったいつかの放課後の出来事、

あの時、教室の中で智子達から苛められていた彼女は、それから暫くして学校に来なくなっていたのだ。あの日、放課後の教室で担任である彩花は麻理絵を守るために体を張って彼女を助けたはずだった。そしてその代償として今度は教師である彩花自身が智子達の標的になり、それから父兄や大勢の女子生徒、教職員の前で途轍もない痴態を晒す羽目になってしまった。それだけの犠牲を払ってまで救ったはずの麻理絵がなぜ不登校になってしまったのか、彩花は心配でならなかった。

まさか、智子達がまだ知らない所で彼女を苛めているのか、あの日、智子が自分の目の前で麻理絵の恥ずかしい動画をスマホから削除したのは確認したが、もしかしたらまだ他にも麻理絵の恥ずかしい動画を握っていて、それで彼女を脅しているのではないか、彩花は次第にそんなふうに考えるようになり始めていた。

麻理絵をちゃんと救わなければいけない。

自分が教師としてあまりにも大きな代償を払ってまで救った女子生徒をこのまま無視する気持ちをさらに奮い立たせたのは、麻理絵のブログに投稿された最近の記事の内容だった。そして、そんな彩花の事はできなかった。

実は、あの放課後の翌日、麻理絵は彩花の元にやって来て、助けてもらった御礼と共に彼女が人知れず自分の日々の想いなどを綴っている日記でもあるブログのURLをこっそり教えてくれていたのだ。彩花はそれを毎日のように読んで、自分に心を開いてくれようとしている彼女の事を少しでも分かろうとしていた。麻理絵のブログは、彼女が学校に来なくなってからも毎日のように記事が投稿され、そこには短い文章で彼女の想いが綴られていた。

麻理絵のブログに気になる記事が投稿されたのは、身体測定の日から一週間が過ぎ、彩花が教師として葛藤の日々を過ごしている時

だった。記事には『もうこの世界から消えてなくなりたい』という一文だけが記され、それまで毎日のように投稿されていたブログもその記事を最後に更新が途絶えた。

彼女に何かが起きている・・・。彩花は無性に彼女の事が気になってしまった。なぜなら、麻理絵のブログに最後に投稿された記事に綴られた言葉は、今の彩花の心情とも重なっていたからだ。

『もうこの世界から消えてなくなりたい』それは彩花の想いを代弁するかのような言葉に感じた。だから余計に彩花はその言葉の意味が知りたくなり、彼女を助けなければいけないという使命のようなものを感じた。そしてそれは、今の自分自身をも救う事になるように思えた。

昼休み、運動部の女子生徒達が使う校舎一階にある女子更衣室の片隅に彩花はいた。彩花の前には智子、ありさ、久美の三人の女子

生徒が並んで立ち、彩花の話を面倒臭そうに聞いていた。ここに四人で集まったのは彩花が智子達を呼び出したからだった。

彩花は、自分の弱みを握り、学校の中で羞恥プレイを命じてくる智子達の事はなるべく避けるようにしていた。しかし、今どうしても彼女達に直接確認しておかなければいけない事があったので、わざわざ天敵である彼女達を人目につかない所に呼び出したのだった。

智子達はまだ麻理絵の恥ずかしい動画を握っていて、それで麻理絵を脅迫しているのか。

彩花の知りたい事はそれだけだった。麻理絵が学校に来なくなり、ブログに『もうこの世界から消えてなくなりたい』と、まるで死を仄めかすようなメッセージを記すほど精神的に追い詰められてしまっている理由を何としてでも解決したかったのだ。

麻理絵の恥ずかしい動画をまだ智子達が握っているなら、今度こそ絶対に削除させなければいけない、ただ、そんな事をすればまた

自分が智子達から酷い仕打ちを受ける恐れはあった。しかし、彩花は自らの体を張ってでも麻理絵を救いたいと思ったのだ。

「北野さん、あなた本当にもう吉野さんの動画を持っていないのね？」

彩花が厳しい口調で問い詰めると、智子はうんざりした表情を浮かべた。

「先生、私の事を疑っているんですかぁ？あの時、先生の目の前で彼女の動画は削除したじゃないですか。もう勘弁して下さいよ」

「ほんとウザいんですけど」

「先生、あんまりウチらに喧嘩売るような真似すると、もっと恥ずかしいプレイさせるよ」

智子達は、彩花を囲みながら毒づいた。

「私は、吉野さんの事を心配してるだけよ。彼女ずっと学校来てないから、もしかしたらあなた達が何か・・・」

彩花はそこまで言って口を噤んだ。

「先生、私達が麻理絵ちゃんを苛めて、彼女が学校に来れなくなったとでも言いたいわけ？」

「はぁ、なにそれ。マジ迷惑なんですけど」

「私達別にもう何もしてないし、あの子が勝手に学校サボってるだけじゃん」

智子達はまるで自分達が悪者のように見られている事に憤りを露わにした。

「ごめんなさい、そんなつもりじゃ・・・」

彩花は慌てて智子達を宥めようとしたが、彼女達の怒りは治まりそうにはなかった。

「先生、そんなに麻理絵ちゃんの事が心配なら、ウチらと一緒に麻理絵ちゃんの家に行って、本人から直接話を聞いてみようよ。そしたら麻理絵ちゃんの気持ちも分かるんじゃない？」

「そうだね、そしたらウチらがもう彼女を苛めてなんかいないって事もはっきりするし、彼女がなんで学校に来ないかも聞けるよね」

「先生、今日学校終わったら、ウチらと一緒に麻理絵ちゃんの家に行くよ」

智子達は麻理絵の家に行く事を勝手に取り決めると、彩花に命令したのだった。

彩花は想定外の展開に戸惑っていた。教師になってから生徒の家を訪問したことなどまだ一度もなかったし、ましてや不登校になっている麻理絵の家に智子達と一緒に押し掛けたら、麻理絵をさらに追い詰めてしまうのではないかと不安になった。

しかし、これは智子達からの命令であり、彩花はそれに逆らう事ができなかった。彩花は、智子達を呼び出して話を聞いたことを心の底から悔やんだが、麻理絵だけは何があっても救いたいという気持ちに変わりはなかった。もう絶対に智子達には彼女に手を出させはしない。そして、もしまだ麻理絵の恥ずかしい動画を智子達が握っていて、それをネタに麻理絵の事を陰で苛めているのであれば、

こうなってしまった以上それもはっきりさせようと思った。例えまた、智子達から屈辱の命令を下される事になったとしても、それが教師としての自分に与えられた使命だと彩花は感じていたのだった。

■海老沢薫ＢＬＯＧ

・・・最新作の出版情報や、そのほか各種コンテンツ情報などを配信。

https://ebisawakaoru.blog.2nt.com/

■そのほかＳＮＳ

https://x.com/ebisawa_K

https://www.instagram.com/kaoru_ebisawa/

https://www.pixiv.net/users/70200870

■海老沢薫Ｗｅｂ連載小説

『清楚な美人妻　彩２７歳　絵画モデル編』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=9281

『清純派女優　結衣２４歳－国民のペットへと堕ちていくヒロイン－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18802

『清純派女優　結衣２４歳－女神の憂鬱－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=26675

『女教師　玲奈２５歳－女性教諭の前代未聞の不祥事－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=17186

『美人社長　里帆２６歳－若き女社長のプライドを砕く屈辱の契約－』

https://regimag.jp/bo/book/detail/?book=18885